授業実践報告　「日本とアジア～『描かれた日本』」における留学生との交流

An exchange between international students and Japanese students through “Japan and Asia: the Japan depicted in foreign countries”

日本語教育講座　准教授　上田崇仁
Department of Teaching Japanese as a Foreign Language
Associate Professor UEDA, Takahito Ph.D

要旨

教養科目「多文化リテラシー」の中で、「日本とアジア～『描かれた日本』」というテーマでの講義を担当している。この講義では、日本がどう描かれているのかを様々な資料を基に知ることと合わせ、本学に留学している海外からの学生との交流を通じて、彼らの目で見た日本像を知ることを通じて、教育や先入観にどれだけ自分たちが影響されているのかに気づくことを重要視している。本稿では、授業実践の中で、2014 年度、2015 年度の留学生との交流活動を示すとともに、活動の様子と学生の受け止め方を報告したいと考えている。

１．講義の概要

2016 年度のシラバスでは、本授業の目標を「戦前、日本の支配下にあった朝鮮半島で製作・上映された映画、流行した音楽、上演された落語、学校教育で使用された教科書、などを手掛かりに、日本は、またアジアはどう描かれていたのかを観察し、教育の持つ影響力について考える」としている。授業計画は以下のとおりである。

１．授業内容についてのガイダンス
２．戦前の映画を見る（1）
３．戦前の映画を見る（2）
４．戦前の映画を見る（3）
５．北朝鮮の映画を見る
６．視聴レポートの振り返りと解説、戦前の流行歌、落語を聞く
７．戦前の日本語の教科書を見る
８．ドキュメンタリー番組から（1）
９．ドキュメンタリー番組から（2）
10. 視聴レポートの振り返りと解説
11. 日本とアジアのかかわりを考える
12. 愛教大の留学生と語る（1）
13. 愛教大の留学生と語る（2）
14. 「留学生と語る」の振り返り、異文化理解について
15. 戦前の日本語教科書を見る（2）、国策紙芝居を見る
16. まとめ　現在の日本語教科書を見る

２．各回の授業意図と内容

2－1. 授業内容についてのガイダンス

ここでは、『おかしなジパング図版帖』(2013 年、宮田珠己、バイインターナショナル)のイラストを用い、これはどこの国の何のイラストかを尋ねることから授業を始める。このイラストは、17 世紀の鎖国時代の日本を想像で描いたもので、実際の日本を知らない人間が人の話だけを頼りに再現したことから、奇異なイラストになっているものである。このイラストとそれに対する問いかけは、書かれているものが解説を読んでも何のことかわからないという戸惑いにつながっている。

この授業の意図は、私たち自身が、実際に見たこともないほかの国や地域に対して持っているイメージは、このイラストと変わらず奇異なものではないのか、という問いかけに学生自身考えさせることである。

続いて、朝鮮民主主義人民共和国で使用された 2002 年、2003 年の「国語」の教科書の抜粋を扱う。

ハングルを理解できる学生はこれまで受講していなかったため、翻訳を付けての読み取りとなるが、小学校の 2 年生 3 年生の教科書に日本や日本人がどう描かれているのかを紹介した。

取り上げるのは、「第 47 課　ねぎの中の秘密」、「第 9 課　勇敢な児童団員たち」の二つである。

どちらも、日本が植民地支配していた当時の社会を描いた作品である。前者は、少女がお遣いに行くときに日本の警察官に荷物をひっくり返されて不審物がないかを調べられ、何も見つからない警察官から不機嫌に追いやられるが、実際は秘密文書をねぎの中に丸めて入れていたのだというストーリーである。後者は、スイカを運んでいた少女からスイカを奪って食べた日本人を児童団員たちが襲い、銃を奪って金日成に渡しに赴く、というストーリーである。

ここでは、日本人がどう描かれているのかを共通理解したうえで、これを読む子供たちは、実際の日本人を知ることなく、このような教育を受けて育っていくということをどう考えるか、という問いかけをする。

教えられたことを、無批判に受け入れる子どもたちにとって、教員は大きな責任を負っていることを自覚させるとともに、それだからこそ、大学での学びは批

判的に行うべきだという基本的な姿勢についての解説を行う。

2－2. 戦前の映画を見る（1）～（3）

ここでは、韓国映像資料院が DVD で販売している日本の植民地時代に朝鮮半島で作成された映画を通して、日本人、日本語、朝鮮人、朝鮮語がどう描かれているのかを見ていく。今年度取り上げた作品は、「志願兵」（1941 年）、「半島の春」（1941 年）、「家なき天使」（1941 年）の 3 作品である。映画そのもののストーリーの説明は行わないが、1941 年という時期に、朝鮮語で会話がされている映画が作られていたこと、朝鮮の人と日本人とが両言語を駆使しながら会話をしている様子を見せ、「日本語が強制されていた」という言葉が独り歩きしている事実に気づかせる。併せて、当時の社会がどのような社会だったのかを映画を通じて確認させ、この映画が何の目的で作られているのかを検討させた。

2－3. 北朝鮮の映画を見る

この回では、戦後、朝鮮民主主義人民共和国で制作された「安重根、伊藤博文を撃つ」（1979 年）という映画を紹介し、伊藤博文の暗殺事件を北朝鮮ではどのように扱っているのかを確認する。ガイダンスのときの教科書資料と合わせ、実際の日本人を知らず、また、事件を当時の資料から確認する手段が取り上げられている場合、情報は事実として伝えられてしまうということを確認した。

2－4. 視聴レポートの振り返りと解説、戦前の流行歌、落語を聞く

映画四本の視聴を終えたところで、レポート課題を出し、そのレポートに基づいた振り返り作業を進める。学生からのレポートでは、1941 年の段階で朝鮮語が普通に映画の中で使用されていることに対する驚きと、それぞれの映画の持つプロパガンダ的な要素への気づきがかかれていることが多い。誤解している部分や、理解の進んでいない事項については、授業内で取り上げ、解説をしている。併せて、当時の朝鮮半島の流行歌、「花　ソウル」（原曲は「東京ラプソディ」）などを聞かせ、当時の日本と朝鮮半島の流行が共有化されていた様子を知るとともに、朝鮮語の歌謡曲が販売されていたことも確認していく。また、落語の「代書屋」を取り上げ、朝鮮の人たちの話す日本語が笑いの対象となっていたことを知るとともに、笑えるほど、そのような状況が日常的であったということを話している。

2－5. 戦前の教科書を見る

主に、日本が植民地とした朝鮮半島の初等教育機関で使用された『国語読本』を自由に読む時間としている。関心のある学生は、どのような話題が取り上げられているのか、どのような挿絵が掲載されているのか、様々な問題意識をもって読んでいる。ここでは、学生たちが歴史の授業で学んできたことを具体的な資料を見ることで体験化し、戦前の教育がどのようなものであったのかを実際に知ることを目的としている。

2－6. ドキュメンタリー番組を見る（1）（2）

NHK の製作したドキュメンタリー番組、「韓国巨文島 47 年目のにっぽん村」、「サハリン日本人妻たちの別れ」を視聴する。前者は、終戦とともに日本に引き揚げてきた方々が、47 年ぶりに生まれ育った地である韓国巨文島を訪問し、旧交を温めるというものである。後者は、終戦とともに日本国籍を失った朝鮮半島出身の方々と、その方々と結婚した日本女性、その子弟を扱った番組である。

どちらも、終戦まで日本がどのようにアジアとかかわってきたのかを、今、自分たちが生きている時代から振り返るというものである。

2－7.日本とアジアのかかわりを考える

NHK の「アジア留学生が見た日本 -明治日本への希望と失望」を視聴する。この番組は、明治維新後の日本がアジア諸国とどのようにかかわってきたのかを当時の留学生の記録から再現し、日本のとった外交政策が失望へとつながっていく流れを追うものである。この番組には、留学生に向けてはなった子どもが学校の先生から聞いた言葉が効果的に取り上げられており、教員の国際認識がいかに重要か、また、教員の子どもに与える影響がどれほど大きいかを実感させることを狙っている。

2－8.愛教大の留学生と語る（1）（2）

ここが本授業報告の重要部分を占める授業である。2015 年度は、中国、韓国、タイ、台湾の留学生にお願いした。下の写真は、その様子である。

6 名の受講者につき、1 名の留学生が入る形で、約 25 分を 1 セッションとして、自由な話題で話をしていく。学生の関心に従って、様々な話が進む。グルーピングは、当日の座った席で適当に区切るため、受講している学生同士が初めて話をすることも多い。話題が広がらないことを避けるために、開始時に、話題に詰まった際の手助けとなるトピックを学生に配布する。留学生にとっては、日本語を話す練習の時間としているため、交流活動は、日本語のみで行う。留学生と接

触することが少ないという本学の学生にとっては、海外に関する情報は本を読んで知っていること、噂レベルで知っていることに偏りがちであり、こういう実際のやり取りを日本語で行うことにより、海外での様子、生活をより実感をもって知ってもらうことを意図しているとともに、留学生にとっての日本がどのようなイメージ化にあるのかを直接聞く機会としている。

2－9.異文化理解について

異文化接触の際に起こる心理的葛藤と、その対応について解説する。

外国人児童生徒を指導する立場になった際に接すると思われる児童生徒の葛藤、言葉が出ない背景、保護者のとやり取りに生じる問題を盲目的に批判するのではなく、客観的にとらえるための知識を与えるものである。また、本学の学生自身の留学経験での心理的葛藤を前向きにとらえるための知識を与えることも目的としている。

2－10.国策紙芝居を見る

戦前、新しいメディアの一つとして登場した紙芝居が日本の統治した地域でどのように利用されていたのかを見るために、国策紙芝居を取り上げて紹介する。中心となるのは、日本語学習の大切さを説く「かはいい孫娘」である。

当時の日本語教育が様々な形態で行われていたことを知るとともに、そこにどのような日本、日本人、日本語観が表れているのかを理解する時間としている。

2－11. 現代の日本語教科書を見る

戦前の教科書に描かれた日本、日本人像と比較するために、現在使用されている日本語の教科書を取り上げ、どこにどのように日本や日本人が描かれているのかを把握する。最後の授業では、マインドマップの手法を用いて、受講生がどのような内容を強く覚えているのか、強く印象付けられているのか、印象に残った授業内容からどのような考えが広がっているのかを振り返る時間を取っている。

３.「愛教大の留学生と語る」で学生が学んだこと

2014 年度は、中国、台湾、インドネシア、ガーナ、メキシコ、ブラジル、韓国の留学生が参加し、2015 年度は、中国、台湾、インドネシア、タイ、韓国の留学生が参加してくれた。

事前に受講生および留学生に伝えたのは、以下のポイントである。

１） 日本語でコミュニケーションをとること。

２） 筆談しないこと。

加えて、受講生に対しては事後の報告レポートの記述について、

３） 必ず留学生の名前を書くこと。「中国の学生が」とは書かないこと。

の３点であった。

話題としては、自己紹介から始まるのは当然だが、表面的な話にとどまらず、お互いの国の具体的な話をできるようにと口頭で指示を与えつつ、話題に詰まることも考えられるので、配布した資料にいくつかの話題の候補を記した。

例えば、

- 愛教大の周りで覚えておくと便利なお店
- 初任給と一か月に必要なお金
- 子どもたちのなりたい職業
- 留学生の国へ行った時に気を付けるべきマナーやタブー
- 理想の結婚相手
- 学校の先生になるには
- 子どもたちの好きな遊び
- 日本の七五三について

などを挙げておいた。

以下、学生から寄せられたレポートを紹介し、学生がどのような気付きを持ったのかを確認していきたい。

3－1. 2014 年度のレポートから

A（養護教育）

私は人見知りで、日本人でも初めて会った人とはなかなか話せないので、とても緊張していた。しかし、実際話してみると、みんなフレンドリーで話しやすい人ばかりだった。留学生のみんなが日本語を得意としているわけではなかったのに、少しずつ話していくとほとんど話が通じたので、言葉があまりわからなくてもコミュニケーションがとれるのだなと思った。普段の生活では、外国の人と話せる機会はほとんどないので、良い経験になったと思う。

B（養護教育）

今まで私はあまり外国の方とお話しする機会がなかったので、相手にうまく自分の言葉を伝えられるか、不快な思いをさせたりしないか、不安に思うことがとても多かった。

初めにお話した方はガーナ出身の〇〇さん。４月に日本に来られてから日本語の勉強をされたようだが、とても日本語がお上手だった。しかし、１番初めに困ったことが起こった、自己紹介だ。名前、年齢までは良かったが、自分の学科の説明をしようとして困ってしまった。“養護教諭養成課程”これでは多分わかりづらいだろうと“保健室の先生”と言い換えてみた。しかし、それでも伝わらず、“子どもの手当てをする先生”でもうまく伝わらない。

最終的には“子供のけがを治す先生”でわかってもらえたようだった。

C（国際文化）
なかなか留学生と話す機会がないので、とてもいい機会でした。（中略）その国、地域ごとの価値観の違いを受け入れることが他の国の方と仲良くする上でとても重要であると感じました。

D（養護）
私は今回の授業で初めて日本語を話せる外国の人と話しました。生まれた国も話す言語も全く異なる人たちと話す事がはじめはとてもハードルが高いと感じていました。しかしそのような私にとって、今回のように日本に関心があって、日本語を勉強しにやって来てくれた留学生たちはとても優しくて話しやすかったです。

E（国際文化）
今回の授業では、留学生の人たちと日本語で会話するということだった。留学生との会話ということで、どうしても英語を使わなければならないという意識があった。しかし、今回は、日本語のみで会話するというとても珍しいと感じる内容で留学生との会話をすることを経験した。

F（日本語教育）
自分でないその他を排除して自分の価値を認めたがる人にとっては、国や民族という境目は凄く使用しやすく使いやすいものなのだろう。私は多くの留学生や学習者の方などと関わり合うなかで、親や周りの環境から受けた外国人に対するイメージの影響を払拭することができた。イメージの払拭というより、個人の集まりであるうちの誰か一人を語る時に大きな括りでまとめるのはいつも正しいわけではないということを学ぶことができた。

G（国際文化）
私は外国人の中でも特にアフリカから来た人は会うことも少ないし、まして話すことなんて初めてであったためとても緊張した。それと同時に、怒らせてしまったらどうしよう、などという感情も生まれた。それは、私が黒人に対して「短気で凶暴」だというステレオタイプを持っているからだと思った。今回お話をしてみて、全然そんなことなかったし、むしろいい人だと感じた。触れたことがないのに勝手に思い込むのは良くなく、直接肌で触れることの大切さを学んだ。

3－2. 2015 年度のレポートから

H（養護）
いろんな国の人と話をしてみて、初めて知ることや驚くことばかりで、新しいことを知れる度にワクワクしながら話を聞いている自分がいて、もっともっと知りたいと思ったし、他の国の人とも話してみたいなと思いました。

I（英語）
今回日本との違いを意識して質問をしていたが、聞けば聞くほど日本との共通点を意識することが多かった。特に言語や娯楽の分野でそれがみられた。しかしながらインドネシアと日本の間に宗教という大きな違いがある。イスラム教について知らないことが多く、日本全体においてもあまり認知されていないであろうことを聞くことができた。宗教と文化は密接な関係があると思うので、多くの国について知るために他の宗教についても理解を深める必要性を感じた。

J（国際文化）
国籍は関係なく留学生と話すこと自体私にとって初めての経験だった。

K（造形文化）
二回の授業でアジアを中心に５人の留学生と話してみて、育ってきた文化が違うと話をするだけで色々な先入観などのその国に対する良い・悪いイメージが変わるので肌で感じることは大切なんだと思いました。

L（国際文化）
既にその国について、ある程度の情報を持っていると思い込んでいても、意外と知らないことが多く、それに衝撃を受けた。

M（情報）
日本人学生と留学生のいろいろな物事に関する考え方やイメージは、ほとんど近いような気がしました。「この国の人は、こう考える」などというバイアスに基づいたコミュニケーションは必要なく、国籍やバックグラウンドを意識しないフラットな姿勢が大切だと思いました。もちろん、相手のバックグランドを留意しないがゆえに、相手の気分を害してしまうことは、あるかもしれませんが、これは日本人同士で会話しても同じことです。「相手は外国人だから」というような、特別意識を持つこと自体

がある意味差別的姿勢であると思います。たんに出身地が違う人、というような感覚でコミュニケーションをとることがいいのではないかと改めて感じました。

N（養護）
私は留学や外国のことにはあまり興味がないので、この機会がなかったら、他の国のことを全く知らず興味も持たず過ごしていたかもしれない。他の国のことを知ることは自分の国を客観的に見ることができるので、この考え方を日常生活にも応用していきたいと思う。

O（造形文化）
ウチモンゴルの上にモンゴルが有るため、モンゴルの生活に近いものが有るらしく、遊牧民族の暮らしに詳しいので色々聞いてみた。

3－3. レポートの傾向

すべての受講生が、だれとどんな話をしたのかを詳細に記してくれていた。ここに挙げたものは、そこに見られた特徴的なものである。

本学の学生は、基本的に留学生との交流が極めて少ないといえる。国際交流サークルや、チューター制度もあり、交換留学制度も整えてあるにもかかわらず、本講義の受講生からは少なからず、留学生や外国人との接触が初めてである、という趣旨のレポートが見られた。(B,C,D,J,N)

外国人とのコミュニケーションには英語が必須であるという思い込みを持つ学生もおり（A,D,E)、学生自身の英語力に対する認識が留学生とのコミュニケーションの妨げになっているようにも感じる。

I の学生のように、宗教や文化に配慮が届き、今後の異文化間の交流についての方向性をつかんだ学生や、L の学生のように、自分の知識が不十分であることへの内省も見られた。

F,G の学生は、交流から広く国際交流に視野を広げ、先入観や偏見を持った状況で過ごすことのデメリットを認識しえたように思われる。

O の学生に関しては、「内モンゴル」の「内」もカタカナで表記していたことから、「ウチ」も一種の外来語として認識していた可能性があり、基本的な国際的な知識を与える授業を準備する必要性も感じた。

４．おわりに

2 年にわたって多文化リテラシーの中で取り組んだこの活動は、それ以前の教養教育の授業の中でも取り組んでいた活動である。

将来、学校現場に立つ教員が日本以外の文化に先入観や偏見を持っていると、学んでいる児童生徒も同様の認識を持ちかねないという危機感を持って準備した活動であった。

本来、国際交流は「英語」によらなければならないという条件はないはずなのに、多くの学生が英語ができないからという理由で、留学生との交流に踏み切れていないこともわかり、留学生にとっても日常的に接触できる日本人学生が限定されていることもわかってきた。

このような授業をきっかけにして、日常生活の中に相互の存在を認められるよう、学生の生活の変化を期待しつつ、2016 年度の授業も準備しているところである。